

# アフガンに生きた中村哲医師が 私たちに遺したもの

—真心、信頼、希望、そして平和

谷津賢二

やつ けんじ  
1961年生まれ  
(株)日本電波ニュース社 カメラマン/監督  
立教大学で社会学を学ぶ  
中村哲医師の活動を21年間に渡り映像での記録を続け、  
2022年ドキュメンタリー映画、劇場版「荒野に希望の灯をともす」を  
監督

私の本来の職業はカメラマンです。カメラマンといつても、ドキュメンタリーや映像記録を撮るビデオ・カメラマンで、もう三五年近くやっています。取材者としておよそ八〇カ国を巡ってきました。先進国は少なく、辺境、ジヤングルや砂漠、山岳地帯や紛争地、そういう国々をまわってきました。実は私の父、そして祖父も教員でした。ですから、皆さんに教職に就かれていろんなご苦労があつたり、いろんな喜びがあつたりするということは、子どもではあつたのですが、父と祖父の背を見

ながら身近に感じていました。

さて今日の講演テーマを私は「アフガニスタンに生きた中村哲医師が私たちに遺したもの」としました。中村哲という個人の話ではありますが、必ずや普遍的な話に結びつくものと思っています。彼のそばで取材をし、薫陶を受けられた人間として、私の経験、そして中村哲という人が何を見つめ、何を考え、何を遺したのかということをお話しさることで、不穏な社会を生きていく上での何らかのヒントを見出していくだければと思います。

中村哲氏は、医師としてパキスタンとアフガニスタンで三五年間活動され、その間、医師でありながら、干ばつのために命を落とす人々を見過ごすことはできないと、まずは井戸を掘る、その後は農地の復活を目指して用水路を掘るという、通常は考えられないような仕方で「境界」を越えていった人でした。皆さんもご承知のように、残念ながら中村医師は二〇一九年の一二月四日、現地で何者かが放った凶弾によって倒れ命を落としました。ただ彼と共に奮闘を続けたアフガン人たちが今でも活動を続けていて、様々な取り組みが現地で行われています。彼には、用水路を掘って荒れ地に緑を取り戻し、人々の命を守つただけでなく、教育者のようなどころがありました。現地のアフガン人は中村医師から学びそれを実践しましたが、その学びというのは生きるための学びだった。きっと彼の生き方には教師という仕事を生きる皆さんに何か響くものがあるはずです。

私と中村医師との出会いは一九九八年の四月でした。それが最初の取材で、最後が二〇一九年の四月から五月にかけてですから、二二年間彼の生を追い続けてきたことになります。その間、アフガニスタンに二五回入国し、四五〇日を超える期間滞在し、そばにいてその姿を撮影してきました。まず強烈な印象を受けたのは、一九九八年の四月、初めての取材のときです。まだ彼が井戸掘りや用水路事業を始める前でした。病に苛まれる人たち、さらには貧しさに苦しむ人たちに寄り添つて、医師として人々の命と向き合つっていました。

中村医師はどんな人でしたかと、よく訊かれことがあります。その時に私は中村哲という人は非常に大きな人です。その時に私は中村哲という人は非常に大きな人です。

## 中村哲医師との出会い

中村医師はどんな人でしたかと、よく訊かれことがあります。その時に私は中村哲という人は非常に大きな人です。

その頃中村医師は、アフガニスタンとの国境のパキスタン側の大きな町ペシャワールで、無償で貧しい患者さ